

図画工作科学習指導案

指導者 天野 紳一

- 1 日 時 令和7年11月15日(土) 第1校時(9:00~9:45)
- 2 学年組 小学校第6学年2組 計30名(男子15名, 女子15名)
- 3 場 所 小学校図工室
- 4 題材名 Seaching for tomorrow 岡本太郎『明日の神話』
- 5 題材について

題材の設定にあたって～教師の願い

原爆投下から80年。私たちの街ヒロシマにとってこの80年は、まさに復活と再生、そして祈りの歴史であった。原爆投下直後、70年間は草木も生えないであろうと言われたこの街が今は緑溢れる国際平和都市へと復興を遂げている。昨年日本被団協がノーベル平和賞を受賞し、その地道な努力がようやく世界に認められたことは記憶に新しいが、核なき世界の実現というヒロシマの願いは実を結ぶことのないまま、未だに人類は核の恐怖と共に生きている。泥沼化の様相を呈するウクライナ侵攻では核兵器の使用も現実味を帯びて取り沙汰されるなど、核の脅威はむしろ高まるばかりである。被爆者無き世界が近い将来訪れることを考えれば、ヒロシマの継承は今を生きる我々に課せられた大きな責務である。

今年は特に高校生や大学生を中心とした若い世代が被爆体験の継承者として自らの意志で世界に向けてヒロシマを発信する姿がたびたび報道されてはいるが、今小学校で生活している子どもたちの多くが一体どれほど「ヒロシマ」や「平和」への思いを抱いているだろうか。人類史上最悪の絶望的な状況の中であって一瞬一瞬を弛まず生き、新しいヒロシマを創り上げた先人たちのエネルギーに満ちた営みに思いを馳せる機会を、図画工作科の学びの中でもつことはできないものか。本題材はこのような願いをもとに設定した1時間扱いの鑑賞題材である。

鑑賞材について

丸木位里・俊夫妻の描いた『原爆の図』(全15部)をはじめとして原爆を題材にした絵は様々ある。被爆の惨状を赤裸々に描いたこれらの絵画作品と正面から向き合う体験は必要であるが、そのリアルに触れた時子どもたちの抱く感情は悲慘さや戦争という絶対悪に対する怒りに集約されるであろう。鑑賞能力を高めようとする図画工作科の鑑賞材としては、より自由で多様な視点から一人一人の想像を駆り立てることのできる作品が適していると考えた。そこで取り上げたのが岡本太郎(1911-1996)の『明日の神話』である。(図1)



図1 『明日の神話』 岡本太郎 1969年 550.0×3000.0 アクリル 東京都渋谷駅コンコース

原爆の炸裂する瞬間を描いたとされる縦5.5m×横30mに及ぶ巨大な壁画であり、かの『太陽の塔』と対をなす岡本芸術の最高峰である。1967年、メキシコのとあるホテルの依頼を受けて制作を開始、1969年にはサインを入れるところまで完成していながら、そのまま長く行方不明となっていたが、太郎の死後7年が経った2003年、太郎の生涯のパートナーであった岡本敏子によってメキシコシティ郊外の資材置き場で発見され、“明日の神話再生プロジェクト”の尽力で現代に蘇った。その設置場所として、被爆地である広島・長崎、『太陽の塔』のある大阪、東京の4か所が候補に挙げられ、世間の注目を集め

たが、現在は太郎の活動拠点であった青山から程近い渋谷駅に設置され、無償のメッセージを放ち続けている。“明日の神話再生プロジェクト”のオフィシャル HP で敏子が述べている通り（以下引用）、この絵の主題は「悲劇に負けぬ再生」であり、まさにヒロシマの歩んできた道程と重なる。

猛烈な破壊力をもつ凶暴なキノコ雲はむくむくと増殖し、その下で骸骨が燃え上がっている。悲惨で残酷な瞬間。（中略）悲劇の世界だ。だがこれは、ただ惨めな、酷い、被害者の絵ではない。燃え上がる骸骨の何という美しさ、高貴さ。巨大画面を圧して広がる炎の舞の、優雅とさえ言いたくなる鮮烈な赤。（中略）外に向かって激しく放射する構図。強烈な原色。画面全体が哄笑している。悲劇に負けていない。あの凶々しい破壊の力が炸裂した瞬間に、それと拮抗する激しさ、力強さで、人間の誇り、純粋な憤りが燃え上がる。（中略）21世紀は行方の見えない不安定な時代だ。テロ、報復、果てしない殺戮、核拡散、ウィルスは不気味に広がり、地球は回復不能な破滅の道に突き進んでいるように見える。こういう時代に、この絵が発するメッセージは強く、鋭い。負けないぞ。絵全体が高らかに哄笑し、誇り高く炸裂している。（後略）

児童の実態

本学級の児童は9月、教育実習生と取り組んだ題材『墨と水から広がる世界』において、三度の鑑賞場面を経験している。水墨画の特徴を把握するための鑑賞、自ら描いた作品に意味を見出し題名を考えるための鑑賞、制作後の相互鑑賞である。特に図工室を美術館に見立てた相互鑑賞『6年2組水墨画作品展』では、「にじみ」「かすれ」「濃淡」といった技法がもたらす印象と作品の題名との関連について考える活動に興味をもち、パンフレットを模した鑑賞シートにびっしり気づきを残す児童も多かった。

また本題材への実態調査を兼ねてサルバドール・ダリの『記憶の固執』（図2）を取り上げ、独立した鑑賞学習を行った。ダリの代表作である『記憶の固執』は、写実的なモチーフの組み合わせによって超現実的な世界が描かれており、この時期の児童の興味を駆り立てるストーリー性をもっている。

この時の学習展開は次の通りである。

- ①個の気づきを思いつく限り付箋に書く（7分間）
- ②グループで互いの気づきを紹介し合う（5分間）
- ③作品の世界観をストーリー化する（10分間）

学習活動①では、一人平均 16.4 枚の付箋を残した。分布からもわかるように全体の 8 割に近い児童が 10 枚以上の付箋を書いている。（図3）1枚ずつの付箋の内容を見ると、単語が中心であったり文章になっていたりするため一概には言えないが、多くの児童が絵をもとにした気づきを何らかの言葉にできることがわかる。3～4名のグループで行った学習活動②ではそれぞれ自分の書いた付箋をもとに活発な意見交換が展開され、活動の最中に新たな付箋を書き加える児童の姿も見られた。「この絵の中で何が起きているのだろう？」という発問で展開した学習活動③で、多くの児童は絵の中の細かなモチーフや構図、明暗の対比などに言及しながら自分なりのストーリーを書き綴ることができていた。

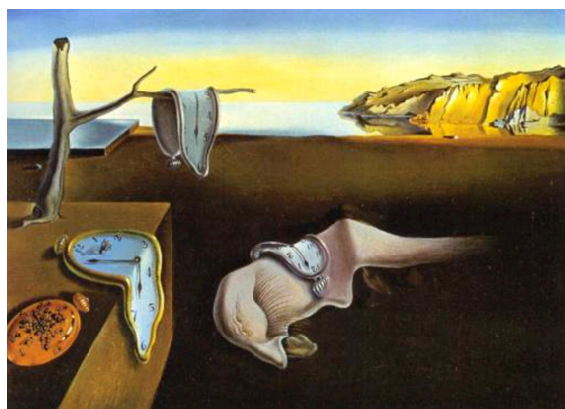


図2 『記憶の固執』

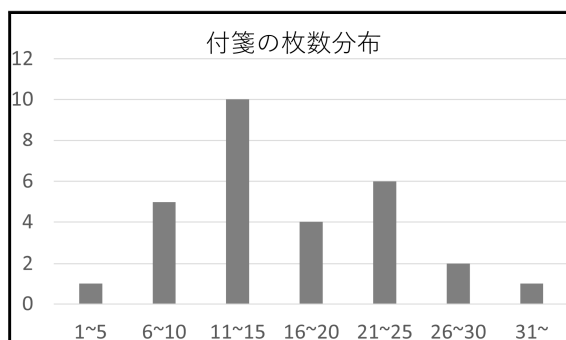


図3 児童が残した付箋の枚数分布

指導の手立て

(1) 導入～作品との出会い

作品の生まれた背景や作者に関する情報、画題等を事前にどの程度伝えるのか、あるいは伝えないのかということがその後の鑑賞の方向性を大きく左右する。鑑賞者である児童のより自由な発想を引き出すには、絵以外の余計な情報がないほうがよい。しかし本題材は、ヒロシマを復活させた先人たちの思いに少しでも気づいてほしいという願いのもとに設定したものであり、本来の『明日の神話』の主題から離れてしまえば意味が無い。そこで導入にあたり、この絵に纏わるエピソード、作者である岡本太郎の人物像、画題について簡単に紹介した上で鑑賞に入りたい。

(2) 主題追求を促す目標設定

本時では、『明日の神話』という画題にはどのような意味が込められているのだろうか」と直接問いかけてみたい。現在、『明日の神話』は計14枚のパネルに分割された状態である。その形態は屏風絵や襖絵を連想させるが、縦横の比率がほぼ2:11という極めて横長な画面はさながら広げられた絵巻物の様相を呈している。ただ、絵巻物では広げていくに従って風景やモチーフが順に現れながらストーリーが展開されていくのに対し、『明日の神話』は燃え上がる骸骨を中心にあらゆる方向へ放射状にモチーフが躍動している。目の前に広がる豊かな造形的要素と結びつけながら、未来を示す「明日」と過去をイメージさせる「神話」という矛盾をはらんだ画題の謎を自分なりの視点から紐解いていく活動は、この学級の児童の興味関心に応えるものになるはずである。

(3) 他者と関わりながら試行錯誤し気づき直す環境設定

児童の実態で述べたように、学級全体としては1枚の絵から多くの気づきを引き出し、それをもとに自分なりの解釈をする活動を楽しむ様子が見られた。その一方で気づきの付箋を1枚しか書くことのできなかった（鑑賞シートには何も書くことができなかった）児童の存在が気がかりである。この児童にとって、この授業は充実感とは程遠い苦しい経験になってしまったかもしれない。そう考えると授業者として申し訳ない気持ちでいっぱいになった。唯一の付箋には「爆弾が落ちた後みたい」と綴られており、多くの児童が感じていた『記憶の固執』の画面に漂う不毛な印象や一切のものが動きを止めた静寂さにつながる気づきをちゃんともっていた。どのような手立てを講じれば自分なりの気づきを広げることができたのか。何の情報も無いまま展開した前回と異なり、本時では画題と関連付けて考えることが発想を促す一つの手がかりになるのではないかと考える。さらに画面に描かれた様々なモチーフを見つけて書き出すという具体的な方法を示すことで、気づきの数そのものを増やしたい。その上で、他者と交流する時間を十分に確保する。自分で気づいたものと交流の中で新たに見つかった気づきとを2色の付箋に書き分けて並べることで、一人だけでは得られなかった見方や感じ方にふれる喜びを感じることができるようになりたい。

7 本時の目標（題材の目標）

画面に描かれた造形的要素から得た気づきや印象、感じ取った想いを仲間とのコミュニケーションの中で見つめ直し、『明日の神話』という画題に込められた意味を自分なりに解釈する。

【知識及び理解】【思考力、判断力、表現力等】

8 「共に生きることを学ぶ図画工作科の授業づくり」との関連

1枚の絵をみて何を感じ、どう解釈し、価値づけるのか…それは最終的には鑑賞者個々に与えられた特権であり、制作者ですら不可侵な領域である。しかし、他者の想いや考えに出会い、それを理解しようと心を働かせることによって、自己の解釈や価値決定はより深みのあるものになる。答えのない問いに対し時、自分とは異なる多様な価値観と出会い、そしてそれを分かり合おうとする営みの中で生まれる新たな視点や価値観は、共生社会を形成する礎となるはずである。

9 学習展開

<準備物> 提示用資料（スライド・拡大図版）、手元用図版、2色の付箋カード多数、鑑賞シート

学習活動と内容	指導上の留意点（◆評価）
1 絵と出会い学習課題を知る（10分間） □鑑賞材となる絵について知る。 ・作者である岡本太郎の人物像 ・作品に纏わるエピソード ・画題『明日の神話』 □絵とじっくり対峙して印象をもつ。 ・何が描かれているのか ・どのように描かれているのか ・見えるもの以外に感じることはないか □学習課題を知り、学習の見通しをもつ。	○『明日の神話』について、本時のねらいに迫る上で必要な情報を提示する。 ○絵とじっくり対峙できる環境を整える。 ・1対1で対峙できるよう、スライドと拡大印刷した図版を用意する。 ○本時の学習課題と活動の見通しを明確に伝える。 ①気づきを思いつく限り付箋に書く。 ②グループで互いの気づきを紹介し合う。 ③『明日の神話』に込められたメッセージとは何か、自分なりの考えをもつ。
『明日の神話』に込められた岡本太郎のメッセージとは何か、自分なりに考えてみよう。	
2 自分の気づきをもつ（10分間） □手元の図版をもとに、より多くの気づきを付箋に書き出す。 ・色、形、描かれたモチーフ等 ・構図、モチーフの配置や関係性、動き等 ・造形的要素を結びつけて感じたことや疑問に思ったこと（音、空気、風、温度、感触等）	○より多くの気づきを書くことができるよう、手元用の図版を個別に配布し、鑑賞の視点を例示する。 ・十分な量の付箋（黄色）を用意する。 ・ここでは気づきの数に価値を持たせる。 ◆描かれた造形的要素やそれをもとに気づいたこと等を付箋に書いている。 【知識・理解】【思考・判断力・表現】
3 気づきを交流する（10分間） □自他の気づきを伝え合い、問い返す交流を通して、その違いや良さを共感的に理解したり再確認したりする。	○交流の目的と価値を伝える。 ・自分だけでは得られなかった見方や感じ方と出会い、学習課題に迫る材料をより多く集めること。 ○仲間との交流の中で新たに気づいたこと、感じたこと等を書くための付箋（ピンク）を配布する。 ◆自他の想いを尊重しながら新たな気づきを書き加えている。【思考・判断・表現】
4 自分なりの考えを書く。（10分間） □『明日の神話』に込められた岡本太郎のメッセージとは何か、色や形、モチーフ、構図など、画面に描かれた様々な造形的要素を根拠に考え、自分なりに解釈する。	○自分で気づいたこと、仲間との交流で新たに気づいたことを含め、付箋を整理しながら自分なりの解釈を進めるよう伝える。 ◆付箋に書かれた気づき、造形的要素を根拠に自分なりの解釈を表現している。【思考・判断・表現】
5 本時の学習をふりかえる。（5分間）	○児童の学びを賞賛し、余韻をもって授業を終える。 ※可能であれば数名、解釈の発表を促す。

【参考文献】 美術出版社（2011）、美術手帳3月号－生誕100年記念特集 岡本太郎－』
小学館クリエイティブ（2015）、『岡本藝術 岡本太郎の仕事1911－1996』

